

魯迅の仙台時代をえがいた 太宰治『惜別』をめぐって

関川 夏央



四六判 286頁
東京大学出版会
[本体 2800円 + 税]

藤井省三著
魯迅と日本文学
漱石・鷗外から清張・春樹まで

藤井省三『魯迅と日本文学』（東京大学出版会）は、明治・大正の日本文学、とくに夏目漱石を愛好し影響を受けた魯迅と、太宰治、松本清張から村上春樹まで、日本文学中心にとどまる魯迅作品の痕跡についての画面から詳細かつ実証的に記述している。その中で私は、〈竹内好による伝記小説「惜別」批判をめぐって〉という副題を付された第六章「魯迅と太宰治」をもっとも興味深く読んだ。

魯迅（周樹人）は一九〇二（明治三十五）年春、満二〇歳で清国国費留学生五名のひとりとして横浜港に着いた。折しも青年たちの「文学熱」の高揚とともに、日本に「文学産業」が成立する前夜であった。彼はまず東京の弘文学院で日本語を学び、二年半後の〇四年秋、仙台医学専門学校に入学した。だが第二学年の一学期を終えた〇六年春、退学して東京

に帰った。

その後、彼は留学生仲間三人と弟周作人で三十五円の家賃を負担して、漱石が早稲田南町に越したあとの西片町の借家に入り、その家を「伍舎」と命名した。そうして魯迅は東京生活と日本文学をたのしみ、外国文学の漢訳と出版にいそしんだ。帰国したのは〇九年秋、七年半の滞日であった。

最初の国費留学生一三名が訪日したのは一八九六年、日清戦争の翌年である。魯迅来日の〇二年には、滞日中の留学生は六〇八名であったが、日露戦争講和の〇五年に急増して約八〇〇〇名となり、〇六年には一万二〇〇〇名に達した。

魯迅は「藤野先生」に書いている。

〈東京も別に変わりはなかった。上野の桜花爛漫の時節は、まことに薄紅色の輕雲かと思われるながめであった

が、花の下にはいつも隊を組んだ「清国留学生」の速成班がいて、頭の上に辮髪べんぱつをぐるぐる巻きにしてのせ、かぶった学生帽のてっぺんを高々とそびえ立たせて、富士山の形をつくっていた」（竹内好訳）

周樹人青年の仙台医専への入学動機は、ひとつには西洋医学を学んで故国の医療に貢献したいという意志であろう。またひとつには「隊を組んだ」清国留学生に辟易して、あえて北国の学校を選んだのもあるだろう。二年前に第二高等学校から独立したばかりの仙台医専で、この年の清国留学生は魯迅ひとりだけ、無試験、授業料免除のうえに下宿探しにも学校事務員が協力してくれる厚遇ぶりであった。しかし仙台的冬の寒さは身にこたえた。下宿で出される「山芋汁」には閉口した。そうして東京という大都会に親しんだ周樹人にとって、仙台はいささかさびしい街であった。

解剖学のうち骨学を担当していたのは「黒く瘦せた」「ゆるやかでとても抑揚のある声調」で語る藤野巖九郎先生であった。「あるとき汽車に乗ったら、車掌から拘摸すうと間違えられて、車内の大勢の客に用心するよういわれた」ほど風采の上がない先生は、あるとき周樹人を呼んで、「私の講義が、君は筆記できますか？」と尋ねた。「まあできます」と答えると、藤野先生は「ノートを見せ給えー」といった。

二、三日後、先生から返されたノートをあけて周樹人は驚いた。「同時にまた一種の不安と感激を覚えた。というのは私の筆記はもう初めから終りまで、朱筆ですつかり改められていたからである」。

その後も藤野先生のノートの添削はつづいた。翌年六月の学年試験では、一五〇人中の五〇人が落第したが、周樹人は進級できた。しかし日本語のハンデイは小さくなかったのだろう、成績は合格者の中位、六〇番程度であった。それなのに学生の一部に、外国人が及第したことを怪しみ、嫉妬する向きがあった。クラスの学生会の幹事が、骨学のノートを見せてくれといってきたのは、藤野先生から周樹人へ試験問題の漏洩を疑ったのである。

周樹人の第二学年は日露戦争講和とともに始まった。細菌学の講義では細菌の形状を「幻灯」（スライド）を使ってしめたが、時間が余ったとき日露戦争の場面をいくつか映した。〈だが生憎なぐと中国人がその中にまじっていた。ロシア人のためにスパイをやり、日本軍に捕えられて、銃殺されるどころであった。それを取り巻いて見物しているのも一群の中国人であった、教室にはそのほかに一人の私もいた。／「万歳！」と彼等はみな手をたたいて歓呼した〉

第二学年の途中で、周青年は医学を断念することに決めた。

しかし藤野先生には、生物学を学びたいからだ、と嘘をついた。

（仙台をはなれようとする数日前、先生は私を自分の家
に呼んで、私に一枚の写真を下さった。裏には「惜別」
とふたつの文字が書いてあった。そして私の写真もくれ
ることを希望するとおっしゃった）

手持ちはなかったので、あとで手紙といっしょに送る、と
約した。しかし約束は果たされなかった。

藤野先生が逐一朱筆を入れてくれたノートを、魯迅は三冊
の厚い本に装丁して大切に持っていたが、それはたび重なる
引越しのうちに失われた。だが先生の写真はいつも書斎の
壁に掛けてある。

一九二六（大正十五）年、魯迅が厦門で書いた「藤野先生」
が、漱石のロンドン留学時代のスケッチ、『永日小品』中の「ク
レイグ先生」の影響下に書かれたとは、比較文学の平川祐弘
氏のつとに指摘されたところだが、その末尾に魯迅はこうし
るした。

（いつも夜中に倦みつかれて、眠気にさそわれたりする
とき、顔をあげると燈光の中に先生の黒く瘦せた顔をチ
ラリと見る。まるで今にも抑揚ある言葉で何か話し出す
うとしていられるかのようなのである。すると急にまた良心

が湧いてきて、そして勇気を倍加させられる。そこで一
本の煙草に火をつけて、再びあの「正人君子」のやから
が痛く憎悪する文章を書きつづけるのである）

太宰治は一九四五（昭和二〇）年九月、周樹人の仙台時代
をえがいた小説『惜別』を発表した。

周樹人と仙台医専同期入学の「私」は、入学匆々出かけた
松島への小旅行で偶然「周君」と出会った。周君は松島の旅
館で「私」に、自分の身上について、また文学について大い
に語った。太宰が造形した魯迅は「相当なモダンボーイ」
であり、また宿のどてらに着換えると「商家の若旦那」のよ
うも見えた。

やがて周君は、学年委員に藤野先生からの試験問題漏洩を
疑われた。疑いは晴れたが、周君は第二学年の途中で退学し
て東京に向かった。しかし太宰は、その契機を細菌学の授業
における「幻灯事件」にもとめなかった。「日本の当時の青
年たちの間に沸騰してゐた文学熱」に刺激された周青年が、
文学専一の生活を送るために仙台を去ったのだとした。

この作品を、魯迅研究の第一人者を任ずる竹内好は痛烈に
批判した。最初の批判は一九四六年になされ、さらに五六年、
五七年と都合三度におよんだ。

中国年鑑2015

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 約500頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝権力集中を進める

習近平政権

格差の拡大、腐敗の蔓延、大国外交等、内外で権力に対する不信が強まる中国。習近平主席は毛沢東・鄧小平のなかりスマ権力者を目指しているのか。中国の現状理解に欠かせない基本情報を提供。

◆動向

政治、華人社会、対外関係、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2014年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は
中国研究所事務局まで

一般
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-cat.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

『惜別』の印象はひどく悪かった。彼（太宰治）だけは戦争便乗にのめり込むまいと信じていた私の期待をこの作品は裏切った」（五七年）と竹内好は書いた。太宰は『惜別』を、四三年一月に催された大東亜会議の共同宣言にのっとった助成金を得て書いた。竹内はそのことをいつている。だが、流布されたイメージよりはるかに勤勉・周到であった太宰治は、まず小田嶽夫の評伝『魯迅伝』（四一年）を読み、ついで『大魯迅全集』全七巻（三六年〜三七年、改造社）を読んだ。四四年一二月には仙台へ調査におもむいた。その同じ月、太宰治のもとに送られてきたのが、約一年前に竹内が書き上げて入宮、旧友武田泰淳の校閲を経て刊行された『魯迅』であった。

太宰治は『惜別』の「あとがき」で、小田『魯迅伝』を「春

の花のやうに甘美な名著」と評した。一方、竹内『魯迅』を「秋の霜の如くきびしい名著」と書いて、こうつぶやいた。「私は狼狽し赤面し、かつはこの奇縁に感奮し、少年の如く大いに勢ひづいてこの仕事をはじめたといふわけである」。

竹内好が太宰『惜別』でもっとも気に入らなかつたのは、魯迅の仙台退去の動機を「幻灯事件」ではなく、「文学熱」ゆえとしたことであつた。それは竹内が魯迅に、また自身自身に設定した「政治と文学の対立」という主題から大きくはずれていたのである。さらに、太宰が『惜別』にえがいた「人間的な魯迅」の姿がすべて不満だつた。

たしかに『惜別』は成功作とはいえない。第一に二五〇枚は長すぎる。また太宰が「むしろ魯迅を読みこみすぎた」結果、「松島海岸の旅館で魯迅が私に延々と語る個人史の見解（原

稿用紙四〇枚強）は、『朝花夕拾』のダイジェストになつてしまつてゐる」という藤井省三の指摘は妥当だ。

しかしさらに藤井省三は、竹内『魯迅』が「なんの批評も解説もせぬまま」「魯迅の小説はまずい」と決めつけたうえで展開する「政治と文学」をめぐる議論は、もともと「不毛」なのだといふのである。それは「魯迅が生きた一九〇〇年代から三〇年代の中国における政治と文学の状況は、竹内が直面していた戦時日本の状況とは相当に異なつてゐた」といふ事実を無視して加えられた太宰批判にすぎないから、「おそらく魯迅の文章を無視して、作者の主観だけででっち上げた魯迅像——というより作者の自画像」といふ竹内の言ひ分は、「彼自身の著書『魯迅』には当てはまるにしても、太宰『惜別』に対しては不当な批判である」。

竹内好による『阿Q正伝』と比較しての漱石『坊っちゃん』評価を見る限り、彼には文学が読めない、少なくとも読もうとしてはいまいとわかる。

太宰はむしろ、竹内『魯迅』に強い違和感を抱き、それを執筆動機のひとつとして「人間的魯迅」を造形したのでらう。太宰の「秋の霜の如くきびしい名著」といふ竹内『魯迅』評と、「大いに勢ひづいてこの仕事をはじめた」といふ言葉が「深い衝撃を受けた」と誤読されたのも、実に戦後日本社会の空

気の反映であつた。

すでに魯迅が生きた時代、『惜別』が書かれた時代、中国共産党が日本で不当に高く評価された時代、みな過ぎて久しいが、にもかかわらず「沸騰する熱」に浮かされた歴史の傷は、まだ生々しく残るのである。

（せきかわ・なつお 作家）

中国文明のはじまり

中国文明の形成と発展の過程を土器、玉器、出土文字資料、青銅器などの展示によつてたどります。一連の中国文明関連の展示の冒頭を飾る「中国文明のはじまり」では、新石器時代から高い技術水準で制作されてきた土器と玉器のほか、前13世紀にまで遡る最古の漢字・甲骨文字や封泥を中心に展示を構成します。

▼会期・1月2日（土）～4月24日（日）▼会場・東京国立博物館 東洋館4室から5室▼開館時間・9時30分～17時00分（入館は閉館の30分前まで）▼休館日・月曜日（ただし月曜日が祝日または休日の場合は開館し、翌平日に休館）▼観覧料金・一般一六〇〇円（二四〇〇円／一三〇〇円）、大学生二二〇〇円（二〇〇〇円／九〇〇円）、高校生九〇〇円（七〇〇円／六〇〇円）中学生以下無料*（）内は前売り／二〇名以上の団体料金▼お問い合わせ先：03-5777-8600（ハローダイヤル）